

チーム友だち

山下壮起

奨励者紹介〔やました・そうき〕

日本キリスト教団阿倍野教会牧師

「わたしはこれらのことを、たとえを用いて話してきた。もはやたとえによらず、はっきり父について知らせる時が来る。その日には、あなたがたはわたしの名によって願うことになる。わたしがあなたがたのために父に願ってあげる、とは言わない。父御自身が、あなたがたを愛しておられるのである。あなたがたが、わたしを愛し、わたしが神のもとから出て来たことを信じたからである。わたしは父のもとから出て、世に来たが、今、世を去って、父のもとに行く。」弟子たちは言った。「今は、はっきりとお話しになり、少しもたとえを用いられません。あなたが何でもご存じて、だれもお尋ねする必要のないことが、今、分かりました。これによって、あなたが神のもとから来られたと、わたしたちは信じます。」イエスはお答えになった。「今ようやく、信じるようになったのか。だが、あなたがたが散らされて自分の家に帰ってしまい、わたしをひとりきりにする時が来る。いや、既に来ていてる。しかし、わたしはひとりではない。父が、共にいてくださるからだ。これらのことを話したのは、あなたがたがわたしによって平和を得るためである。あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている。」

(ヨハネによる福音書 16 章 25-33 節)

選挙

今日の礼拝の準備していたのは、立憲民主党の代表選挙や自民党の総裁選が行われているときでした。また、兵庫の前知事が議会の全会一致による不信任の議決を受けて失職して、出直し選挙をすることを発表したときでした。この選挙づくめの状況での報道を見るなかで、考えたことがありました。それは、選挙とは、実は敵か味方かの線引きをして、そうした関係を生み出すものでしかないということです。立憲民主党や自民党という同じ党内であっても代表の立場をめぐって、味方となってくれる人を募り、そうでない人は敵になります。兵庫県の場合でも同じです。これからの行われる出直し選挙で、もし前知事が当選したらどうなるか。議会はもう一度不信任決議を出すのでしょうか。あるいは、前知事に投票するのかどうかで、県民同士のあいだで敵か味方かの分断が生じてしまうかもしれません。

実際、もうすぐ大統領選挙が行われるアメリカでの分断状況は日本よりも深刻です。今年の4月、「シヴィル・ウォー」という国内での戦争・内戦を意味するタイトルの映画がアメリカで上映され、大ヒットしました。いまの分断が進めば、ほんとうに国内で敵と味方に分かれて戦争が起きるのではないかと、そうした危機感を描き出すために制作されたのだと思います。

この世の現実

政治や選挙とは、実は、わたしたちの間に敵か味方かという線を引いて、分断を深めるものになってしまう、それがいま形となって現れつつある現実を前にして、わたしは「敵を愛しなさい、迫害する者のために祈りなさい」というイエス・キリストの言葉を思い起こします。そして、そのように語ったイエスは、自分を迫害する者たちによって捕らえられて、十字架に架けられて殺されてしまいました。そんなイエスは、先ほどお読みした聖書箇所なかで、「わたしは既に世に勝っている」と言っています。

イエスがそう語ったのは、十字架に架けられる前の日の夜、弟子たちと一緒にパンとブドウ酒を分かち合った最後の晩餐でのことでした。イエスは、これから自分が捕らえられ、不当な裁判にかけられて殺されることをわかっていました。だとするなら、「わたしは既に世に勝っている」という言葉はなにを意味するのでしょうか。この世において、勝利とは敵を打ち負かし、自分の脅威となるものを消していくことです。そして、この世にはさまざまな競争があり、残念ながら、勝ったか負けたかで人間の価値が判断されてしまいます。だとするなら、十字架で殺されたイエスは勝者などではなく、大いなる敗北者です。ユダヤの宗教権力者に目をつけられ、ローマ帝国への反逆者として殺されてしまい、十字架のうえで独りぼっちで死んでしまったからです。

その姿は、「わたしをひとりきりにする時が来る。いや、既に来ている」という言葉において予告されています。しかし、イエスはそれを打ち消すかのように、「わたしはひとりではない。父が、共にいてくださるからだ」と語ります。つまり、十字架のうえで独りぼっちにされたイエスと共に神がいるということです。この言葉は、この世で独りぼっちにされる者と共に神がおられることをはっきりと示すものです。ここにイエスの語るこの世に対する勝利が示されています。

この世に対するイエスの勝利とは、人間の考える勝利とは全く異なるものです。相手を打ち負かす勝利、武力による勝利、利益競争の勝利などではありません。そのような目に見えるものを求めて競い争う人間によって無関心に晒され、競争の邪魔者と見なされて置き去りにされ、傷つけられた一人の人間の痛みや苦しみのなかに神がおられることが、この世に対する勝利です。この世は能力や生産性によって人間の価値や優劣、勝ち負けを決めます。競争において敵とされた者は徹底的に打ちのめされ、負ければ支配下に置かれます。しかし、神はすでにわたしたちをよいものとしてくださるゆえに、打ちのめされ、敗北し、傷ついた者と共におられます。

チーム友だち

イエスのこの世に対する勝利とは、そのような神を見出していくことです。逆にいうならば、この世は神を見出していないゆえに、競争し、優劣を競い、勝ち負けを決めようと争います。それは絶対的な地位を求めることです。絶対的な地位を求めることは、言い換えるならば自ら神になろうとすることです。そして、自ら神になろうとすると、他者という存在は自らが絶対となることを妨害する敵となってしまいます。それゆえに、他者との競争や対立が生じ、相手を友や仲間、共に生きる者とするのを不可能にしてしまいます。

そのように神を見失ったこの世において見捨てられた人びとの友となるために、神は人間となってこの世に來た、それがイエスであることを聖書は伝えています。神がイエスという人となられたのは、わたしたちの友となるためです。だからこそ、イエスは今日の聖書箇所在先立って、最後の晩餐でのメッセージのなかで「わたしはあなたがたを友と呼ぶ」と言われます。それは、聖書をつうじて記されるイエスの姿、競争や諍いの世にあって疲弊した人びとを食卓へと招いて一緒に飲み食いし、その一人ひとりの友となられた姿を表すものです。

そんなイエスの姿から、今年大ヒットしたラッパーの千葉雄喜の「チーム友達」の歌詞を思い出しました。千葉雄喜は大阪の鶴橋で友達と一緒にお腹いっぱい美味しいお好み焼きを食べるとラップして、「契り、契り」と繰り返し、続けて、「契ろう、契ろう」と連呼しながら呼びかけています。契りという言葉は、相手を絶対に見捨てないという約束です。たとえ、どんな失敗をしても、どれだけダメな人間と見なされても、相手がこの世から見捨てられ独りぼっちにならないために、友達としての契りを交わすこと。それは、敵か味方を判別して、対立を生み出すこの世の在り方とは一線を画すものです。

イエスがこの世のなかで見捨てられ、独りぼっちにされてきた人びとの友達となったのも、誰をも独りぼっちにしないためです。イエスが人びとを食卓に招いて一緒に交わしたぶどう酒、そして、最後の晚餐でのぶどう酒は、共に生きようという「契り」です。そして、復活したイエスはいまを生きるわたしたちにも「契ろう」と呼びかけています。この世で敵と見なされた人びと、邪魔者と見なされた人びと、価値のない者と見なされた人びととイエスが契ったそのチーム友だちという関係がこの世に勝利することを聖書は伝えています。

神は共に生きるために他者という存在を与えてくださいます。自分の踏み台にしたり、打ち負かして自尊心を高めるために、他者は存在しているわけではありません。苦しみや悩みを分かち合い、喜びを共に味わうために他者との出会いが与えられています。そのことを教えてくれたイエスの愛がこの世の無関心に打ち勝ちます。イエスの示した平和がこの世の憎しみに打ち勝ちます。友なき者の友だちになられたイエスに連なり、イエスのチーム友だちとして、わたしたちもここから共に生きる歩み、この世の重荷を共に担う生き方を始めていきたいと思っています。

祈りを献げます。

神様、あなたはわたしたちのためにこの世に降り、わたしたちの友となってくださいました。あなたが日々の重荷、悩みや苦しみを共に背負ってくださっていることを感謝します。わたしたちもこの世で居場所のない人びとの友となり、あなたの平和を実現していくことができますように。この祈りをわたしたちの友だちイエス・キリストのお名前によってお献げします。アーメン。